ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　部屋を出たぼくは、いつもはこのまま教室に向かう。だけど、部屋の戸をしめた後、すぐ近くのかべによりかかって、そのままズルズルとすわりこんでしまった。なるべく右手を見えないところにおく。つかれた。もうすぐ昼休みも終わるし、『２５番』と部屋で会うやくそくをしていたけど、しばらくはここから動きたくない。

　六年間、毎日ここでカウンセリングしてもらっているけど、このザマだ。ぼくのこの病気は、なおる様子がない。良くなった点といえば、おなかに入っているものを、もどさなくなったことだけだ。それも近くに先生がいてくれるからだ。あの赤黒いえき体を見れば、どうしても体のふるえは止まらないし、思うように動かすことも出来ない。今、自分の右手には、あのいまいましい血がついていて、ぼくはそれを見ることが出来ない。今すぐにでも、このベタベタとしたかんしょくを何とかしないと、頭がおかしくなりそうなのに、見るのがこわい。そんな自分がいやで、ぼくは左手を、かべにたたきつける。でも、本当は右手をたたきつけたかったのに、目に飛びこんでくるかもしれないと思うと、たたきつけられなかった。それがなさけなくて、くやしくて、だんだん、はなのあたりがスースーするようなかんかくにおそわれ、目のあたりが熱くなる。

　いつまでもそうしているわけにもいかない。とりあえず、この右手を何とかしようと思ったぼくは、トイレに向かった。

　なるべく手を見ないようにあらった結果、あらうのに十分くらいかかってしまい、ぼくの耳に五時間目の算数がはじまるチャイムが聞こえた。ここから走っても、教室まではけっこうかかる。とはいえ、走る気力はない。教科書を取りに、一度部屋にもどらないといけないからで、そうすると、じゅぎょうの半分くらいは終わってしまう。しかたないからサボることにしたが、まぁ、もとより出る気分にはならなかったし、これが初めてというわけじゃない。それでも、後で先生におこられることを思うと、気が重かった。ここの先生は、いいわけをゆるしてはくれない。さっきのカウンセリングの先生だけは聞くだけ聞いてくれる。どのみち、おこられることがほとんどだけど。

　つぎの理科の時間まで、少し時間があるので、ぼくは部屋にもどることにした。『２５番』はいないと思うけど、それでも、部屋にあるふかふかのベッドで休みたい。部屋までもけっこう時間がかかるので、五分くらいしか休めないだろう。でも、それでもよかった。

ぼくの、いや、ぼくたちの部屋は、ここの四階の南、一番かどっこにある。四人部屋だけど、今住んでいるのはぼくと、『２５番』だけだ。日当たりがちょっとわるいから、あまり人気はないらしい。何人も出たり入ったりしているが、ずっと住んでいるのはぼくたちだけである。そのぼくたちも、ほかの部屋にひっこすのがめんどくさいからダラダラとこの部屋に残ってるだけで、この部屋が気に入っているわけではない。まぁ、今はあいつと二人でワイワイやれるから、その点ではこの部屋で良かったと思えるわけだけど。

だれもいないのは分かっているけど、ついくせで、ドアをノックする。このままだれも返事はしないはずで、ぼくはドアノブに手をかけた。すると――

「はい」

　同年代の子たちよりもおさなさの残るその声は、よく知っている。あわてて中に入った。

「おそいぞ？　お前が来ないから、おれまでじゅぎょうをサボるハメになっちまったじゃねーか」

　ブロンド色のかみがよくにあう、色白のはだ。するどくとがったような、灰色の目をこちらに向け、『２５番』はそこにいた。まどの近くのつくえのいすにすわっている。どうやら、勉強中だったみたいで、ドリルとノートが広げてあった。入ってきたのがぼくだと分かると、そう言って、形のいいくちびるを少し上げる。

「ご……ごめん。でも、どうして……？」

「いや、おれも先に行こうかとも思ったんだけどさ、『６８番』が部屋に来ないし……行くのはたしかにおそかったけど、こりゃ、カウンセリング室で何かあったかなって」

「そっか……しんぱいしてくれたんだ」

「まぁ、お前がカウンセリング室でなんのカウンセリング受けてんのかは知らないから、おれは何もしてやれねーけどな。ここじゃ、あんまり自分のことをペラペラとしゃべっちゃいけないきまりだし」

　やれやれといった感じで、『２５番』がそう言った。それでも、後で『２５番』も先生におこられるのはまちがいない。ずっとなやんだにちがいないと思う。にもかかわらず、自分をしんぱいして待ってくれたことがうれしくて、でも、それがすごくもうしわけなくて、ぼくはどう言っていいのか分からなかった。

　だまったままそこに立っているのもあれなので、ぼくは二段ベッドの下の方のベッドにこしかける。ぼくのベッドは上の方で、こっちは『２５番』のベッドだ。『２５番』のぬくもりと、ミルクのにおいがちょっと心地よくて、ぼくは後ろにたおれこむ。

「おい、そこおれのベッドだぜ？」

　あきれたような『２５番』の声。でも、ここから動きたくなかった。今はただ、このぬくもりに体をあずけたい気分で、ぼくは返事をするかわりに、手をあげてヒラヒラさせる。すると、ぼくのおなかがグゥーっと音を立てた。そういえば、お昼ごはんをまだ食べていない。でも、食どうはもうしまっているはずで、ばんごはんまで開かない。

　このままおなかが空いたまま午後のじゅぎょうを受けるハメになってしまったことに内心ためいきをつくと、『２５番』がプッとふきだした後、ぼくに何かをほうりなげる。おなかのあたりにおちたそれを見ると、ラップにくるまれた、二つのロールパンだった。あわてて起きて、ぼくは『２５番』を見る。

「どうせ昼めし食ってねーだろうと思って、食どうからくすねてきた」

　ニヤっとわらいながら、『２５番』は得意そうに言う。食どうから食べ物を持ち出すことはきんしされていて、バレたらすごくおこられるはずだ。

「あ……ありがとう、すごく助かる！」

「一口一口、おれにかんしゃしながら食えよ？」

「もちろん！」

　そう言うやいなや、ぼくはラップをはがし、パンにかぶりつく。いつもはそっけないバターの味しかしないけど、今食べたこれは、それよりもおいしく感じる。これは『ほけん体育』のじゅぎょうで習った『くうふくこうか』のおかげだけではないだろう。ぼくはあっという間に、二つのロールパンを食べ終えてしまった。

「なんか……ごめん。もしバレたら、ぼくもいっしょにおこられるから……」

「気にすんなよ。どうせバレやしないって」

　ケラケラとわらい飛ばして、『２５番』はぼくのとなりにすわる。ベッドは二人でならんですわるには、さくがあるせいか、ちょっとせまい。

「なぁ……」

「なに？」

「『６８番』はさ、名前、どうする？」

「名前……？　あぁ、あれのことか」

　とつぜんのことに、いっしゅん何のことか分からなかったけど、ぼくはすぐに『２５番』が言っていることを理解する。

「とりあえず、テストが終わったら考えるつもりだよ」

　来週あるテストにごうかくすると、ここを出る前に、いくつか決めることがある。その中の一つが、自分の名前を考えることだ。でも、ちょっと気が早すぎる。まだぼくたちは、テストにごうかくしてないのだ。たとえそれが、かんたんなテストだとしてもである。だから、ぼくのこの考えは、ふつうだと思う。

　でも、『２５番』はちょっとこまったような顔をした。そして、ぼくも答えを返しづらいことを言う。

「なぁ、今決めてしまわねーか？」

　ここでは、あまり自分のことを話してはいけない。どんな色や食べ物が好きとか、だれが好きとか、そういうことは言ってもいいけど、例えば、ぼくの病気のこととか、ここに来る前に名乗っていた名前は言っちゃいけない。そして、とくに言えないのが、自分がここを出たらどうするかとか、自分がどういうことをどういう風に決めたか、である。もちろん何も言えないわけじゃない。外に出たら、こういったお店に行ってみたいとか、こういうものを食べてみたい、ということは言える。でも、すくなくとも、今『２５番』が言ったような、『自分の名前』をどういったものにするか、は、言っちゃいけないのはまちがいないはずだ。バレたらおこられるだけじゃすまないだろうから、ぼくは首を横にふりたかった。

　でも、そう思うのと同時に、首をたてにふりたい気持ちもある。ぼくたちは、そもそも『名前』というのが、どういうものなのか知らない。先生も名前を教えてくれない――ぼくたちのじゅぎょうをしてくれる先生は一人しかいないから、名前を知らなくてもこまらない――し、じゅぎょうでも人の名前は出てこない。国語の教科書の、しょうせつに出てくるとうじょう人物は、全部『ぼく』とか『あの子』だ。来年から始まる『歴史』というじゅぎょうで、ようやく人の名前を知ることが出来るみたいだけど、その名前は使えない。いちおう、自分で考えた名前が使えるかどうかのかくにんはするらしいけど、変な名前になってしまわないか、正直ふあんだ。

　だから、ここで『２５番』といっしょに名前を決められるのは、ぼくとしても、すごくありがたいことだった。一人が二人になれば、変な名前になりづらいはずだ。多分『２５番』も、そう思ったのだろう。

「……でも」

「だいじょうぶだって。ここなら、バレるしんぱいもねーし」

　出来るかぎり『２５番』は声をひそめ、そうささやく。まるでアクマのささやきにも聞こえて、ぼくはついに、首をたてにふってしまった。まぁ、さっきお昼ごはんくれたし、ぼくもきそくの一つくらいやぶれないようでは、『２５番』にもうしわけがたたない。

「よっしゃ！　じゃあ、さっそく決めちゃおうぜ！」

「ざんねん、もうすぐ理科がはじまるよ」

　さすがに次のじゅぎょうはサボれないので、ぼくはキッパリそう言った。

「い……いや、今日一日くらい、いいんじゃねーか？　ほら、おれも『６８番』も、理科のじゅぎょうはサボったことねーし……」

　あきらめわるくそう言う『２５番』だけど、そこはゆずれない。ぼくのためでもあるけど、『２５番』のためにも、だ。『２５番』は今日の算数のじゅぎょうは、ぼくのせいでサボってしまったから、これいじょうサボらせるわけにはいかない。

　ぼくは『２５番』をひっぱって、次の理科のじゅぎょうにむかった。

「……で、名前のことだけどよ」

　今日のじゅぎょうが全部終わって、夕食の前に、ぼくと『２５番』がおふろに入っていた時のこと。ほかにも七つふろばはあるけど、このふろばは、ここじゃ一番広いふろばなので、入りにくる人も多い。とは言え、夕食の時間が近くなれば人もへる。ぼくたちは、おふろはゆっくり入りたいと思っている――まぁ、それだけが理由じゃないけど――ので、いつも夕食の少し前に来ている。まぁ、入ってすぐは、この日も三十人はゆうに入れそうな湯船がまんぱいになっていたが。それでも一人、また一人といなくなっていき、ついにふろばにぼくたちしかいなくなると、ぼくが頭をあらっている最中にもかかわらず、『２５番』はぼくに話しかけてきた。

「おれさ、今日のじゅぎょう中、いくつか考えてみたんだよ」

「テストおちるよ？」

　うっすらと目を開けて、かがみの中の『２５番』を、できるかぎりのジト目でにらむ。でも、目にシャンプーが入ってきてしまった。思わず目をこすったけど、手についたあわが、さらにすりこまれる。ぼくはあわてて、シャワーのノズルをひねった。

「おいおい、だいじょうぶかよ……まぁ、テストは問題ねーよ。きのうのもぎテストも、ごうかく点にはとどいてたしな」

　そしてぼくのジト目に気づいていないのか、本人はケラケラとわらって、そう言う。ぼくは目とかみに残ったシャンプーをさっとあらい流し、ふりかえって、あらためて『２５番』をにらんだ。

「あのね、いくらかんたんだからって、なめてると変なところで……」

「『６８番』はしんぱいしょうなんだよ。だいじょうぶだって、勉強もちゃんとしてるし」

　ぼくが最後まで言い終わらないうちにそう言う『２５番』に、ぼくはついに注意するのをあきらめた。長年のけいけんから分かったことだけど、『２５番』がこんな感じのときは、何を言ってもむだだ。ここで、ちょっといたい目を見てはんせいするのが、いつもの『２５番』である。

　とは言え、今回にかんしては、『２５番』がはんせいすることはないだろう。ぼく自身も、もぎテストではいつも百点まんてんに近い点を取っているし、それは『２５番』も同じだ。もちろん、ゆだんしないにこしたことはないけど、「だいじょうぶだ」と言って、その先のことを考えたくなる『２５番』の気持ちも分かる。それに『２５番』がどんな名前を考えたのか、ぼくはとても気になった。まぁ、じゅぎょう中にかんけいないことを考えているのはよろしくないけど。

　シャワーをあび終えて、ぼくたちは湯船に向かった。タオルを小さくたたんで頭に乗せ、かたまでお湯にゆっくりつかり、はぁー、と息をはく。

「……で、どんなの考えたの？」

　部屋に行ったら、いつもより多めに『２５番』に勉強させようと心にちかって、ぼくは聞く。

「えーっと、三つ考えてあんだよ。一つ目が『一位』」

「……『一位』って、あの一位？」

「ああ。人間だれしも、トップを目指したいからな。で、二つ目が『グラタン』」

「あっ、『２５番』が好きな食べ物だね」

　そうすると、ぼくの名前は『シチュー』になるなと、ぼくは思う。

「まあな。好物が自分の名前なら、なんかこう、テンション上がりそうじゃね？　って思ったわけよ。で、最後に『カイザーナックル』」

「『２５番』の使う武器だね」

　そうすると、ぼくの名前は『木刀』になるなと、ぼくは思う。

「ああ。あいつはおれと一心同体だから、やっぱ自分の名前にしたいと思ったんだけどさ、『６８番』はどれがいいと思う？　おれてきには、一番良さそうなのは、やっぱ『カイザーナックル』だと思うんだよ」

「うーん……どうだろう？」

　あごに手をやりながら、ぼくは今『２５番』が言った三つの名前を、頭の中で何度もくりかえしとなえる。

　ぼくは、首を横にふった。

「ねぇ『２５番』、ぼく思うんだけどさ」

「……ん？　どうした？」

「名前ってさ、きっと聞いたら、その人のことがパッと頭にうかばないとダメだと思うんだ。何か、さっき言ったやつって、どれも『２５番』のことよりも、べつのかんけいない物を考えちゃうんだよ」

「……なるほど」

　ぼくと同じように、あごに手をやりながら考える『２５番』。多分、べつの新しい名前を考えているのだろう。でも、けっきょく思いつかなかったみたいで、こまったような顔で『２５番』はぼくを見る。

「何かいい名前ねーか？」

　そう言われて、すぐに思いつくくらいなら、くろうはしない。でも、さっきダメ出ししておいて、そんなことは言えなかった。とりあえず考えてみる。自分がすぐに思いうかびそうなものって、なんだろう？

「番号……」

「ん？」

　ここでは名前がないから、ぼくたちはおたがいに、番号でよびあう。この番号は名前じゃないし、下二けたが同じ番号の人もいるけど、『６８番』と言えばぼくだと分かるし、『２５番』と言えば、今目の前にいる友だちのことだと、すぐに分かる。ぼくたちが持っている、たった一つの名前のかわりだ。

「けんしゅうせい番号、使えないかな？」

「あぁ、あれか？　どうやって？」

「えー……っと、たとえば『２３番』は『フミ』みたいな名前をつければ、何か名前っぽそうじゃないかな？　ここで使っていた、名前のかわりみたいなものから取っているから、その人のイメージも思いうかべやすそうだし」

「……なるほど、ごろ合わせってやつか」

　なっとくしたように、『２５番』はうなずく。

「じゃあ、おれは『２５番』だから『フゴー』ってのはどうだ？」

「……いや、それはカッコ悪くない？」

　ぼくがそう言うと、『２５番』はうなる。再び何か思いついたのか、目をかがやかせてぼくを見た。

「『トゥー・ファイブ』ってのはどうだ？」

「英語かぁ……悪くないと思うけど、まだちょっとなぁ」

　すると、今度は指をパチンとならす『２５番』。また何か思いついたのだろう。

「『フゴー』と『トゥー・ファイブ』を組み合わせて、『トゥーゴー』ってのは？」

「えぇー？　変じゃない？　っていうか、『トゥー』からはなれなよ……って、いや、待てよ？」

　ふと思いつき、ぼくは湯船からあがり、タイルのかべに、今聞いた言葉を書きなぐる。指先についた水てきがひんやりとして、ちょっと気持ち悪い。でも、そんなこと、どうでも良かった。

「ええっと、これがこうで……」

　書いた文字から、『―』を消す。その後、『ゥ』を『ウ』に直して、あらためて出来た言葉をタイルに書く。

「『トウゴ』……これならどう？」

「『トウゴ』か！　いいな、それ！」

「いや、『ゴ』じゃなくて『トウ』にアクセントね？」

　湯船の中から変な所を強く発音した『２５番』に、思わずプッとふき出して、ぼくは首を横にふりながら言う。でも、われながらいい名前を思いついたと思う。気づけば『２５番』も『トウゴ』という言葉を、何度もくりかえしとなえていた。

　すると、となえている内に何かを思いついたのか、ハッとした様子で再びぼくを見る。

「なぁ、カタカナじゃなくて、漢字ほしくねーか？」

「あー、なるほど」

　たしかに、自分で書いた『トウゴ』という文字を見ていると、カタカナよりは漢字の方がいいかもしれないと、『２５番』に言われてぼくも思う。でも、パッといい漢字が出てくるわけでもなく、こればっかりは漢和じてんにたよることになりそうだ。

同じことを『２５番』も思ったのか、今度はぼくの番号をつぶやきはじめる。でも、あれこれブツブツつぶやいていても、どうやら『トウゴ』いじょうの出来の名前が思いうかばなかったようで、やがて、ガックリといったようにかたを落とした。

「こっからは、じしょを使わねーとダメっぽいな……」

「そうだね……」

　ぼく自身も、ちょっと考えてみたけど、いい名前が出てこない。まぁ、そんなにすぐに出てくるとは思ってなかったけど。

「じゃあ、この続きは部屋でってことで！」

「その前に、勉強が先だよ……」

　あやうくうなずきかけたぼくだったけど、あわててそう言う。『２５番』といっしょに名前を考えるのも楽しいけど、その前に、テストにごうかくするのが先だ。それに、さっき勉強させようとちかったばかりだし。「うへぇ」なんて顔をしかめる『２５番』だけど、理科のじゅぎょう中、よけいなことを考えたペナルティーは、本人のためにもひつようだろう。

　とは言え、とりあえず勉強の前に夕食が先だ。ぼくたちは最後に湯船につかって十数えてから、おふろからあがった。

「何かいい漢字あった？」

　夕食も終わり、自分たちの部屋で、漢和じてんをパラパラとめくりながら、ぼくは『２５番』に聞く。けっきょく『２５番』には勉強させたものの、頭に入っているかどうかはあやしい。終始、名前の方に気がいっていたし、それはぼくも同じだったからだ。何度も何度も勉強からだっせんした。なんと情けないことか。

「おぅ。こんなのどうだ？」

　そんなぼくの気も知らず、ずいぶんと楽しそうな様子で、『２５番』はノートをぼくに見せる。白いはずの紙は黒い。『２５番』も漢和じてんで漢字をさがしていたためか、まだぼくたちが習っていない、様々な漢字がノートをびっしりとうめていて、右下のあたりに丸でかこまれているやつがあった。ぼくは漢和じてんをとじて、それを見る。

「『闘悟』……？」

　いっしゅん、何と読むのか分からなかったけど、それがさっき考えた『トウゴ』を漢字にしたものだと分かり、ぼくは読み上げた。『２５番』はうなずく。

「おうよっ！　『闘う覚悟』で『』だ！　けっこう良くね？　ほら、おれって、ええっと、なんだっけ？　あの、近くでたたかうの……あぁ、そうそう。インファイターってやつだからさ」

　得意げなその様子に、ぼくもうなずいた。たしかに、この漢字は『２５番』にピッタリかもしれない。

「んじゃ、おれ、これにしよーっと！」

　よほど気に入ったのか、『２５番』は自分がいつも体育の時間で使っている、お気に入りのカイザーナックルの手でにぎる所に、マジックペンで『闘悟』と書く。最初は大きく書こうとしたようだったけど、あまり目立つと先生にバレるかもしれないことに気がついたようで、小さく書いた。

「それじゃ、次は『６８番』の名前だな」

　マジックペンをしまい、『２５番』はぼくの方に向き直る。

「『６８番』だからなぁ……『ろくっぱち』ってのは？」

「……もっとかっこいいので」

「じゃあ、『ろくや』はどうだ？」

「それはぼくも考えたけど、いい漢字がないんだよね……」

「ん？　そうか？　おれもさがしてみる」

　再び漢和じてんを開く、ぼくと『２５番』。パラパラとページをめくる音だけが、しばらくは聞こえていた。

　でも、しばらくすると、『２５番』はあきらめたのか、漢和じてんをベッドにほおり投げる。そして、何を思ったのか、今度は和英じてんを引っぱり出す。和英じてんなんて、めったなことがなければ、そもそも、ふれることさえしないやつだ。

「……どうしたの？」

「いや、漢字でいいやつがねーから、いっそカタカナでかっこいいやつを、と」

　なるほど、とぼくは思う。たしかに、ぼくは日本語にとらわれすぎていたかもしれない。ぼくも、もらってから一、二回しか開いていない和英じてんを、ひさしぶりに取り出す。開こうとした、その時だ。

「なぁ、『８』ってさ、『走る』と、音がにていないか？」

「……そう？」

　頭の文字が『は』から始まることいがいに、どこがにているのだろうか。文字の数もちがうし、強いて言うなら、続く『ち』という音と『し』という音がにている……かもしれない。

「ほら、『使い走り』って、『パシリ』っていうじゃん？　あの『パシリ』って、『使い走り』の『走り』からきてんだろ？　『パシリ』と『８』もにていると思わないか？」

「……うーん？」

「『８×８＝６４』の『８×８』って『ハッパ』って読むじゃん。だから、『パシリ』の『パ』は『８』の『パ』なんだよ。そんでもって、『６８番』の『６８』って、番号の下二けただろ？　つまり、『６８番』の『８』は、一番最後の数字で、最後って『おしり』っていうじゃん？　とすると、『パシリ』の『シリ』にあたるんじゃね？」

「……はぁ」

「そう考えれば、お前の『８』と、『走る』もにているだろ？」

　なんか、すごくダマされる気がするが、そう言われると、にている気もしなくもない。

「でも、さすがに『ろくはしり』とか『ろはしり』なんて名前は変じゃん？　で、おれ、和英じてんで『走る』ってひいてみたんだよ」

　そう言いながら、『２５番』はぼくに英和じてんの、『走る』という字がのっているページを見せる。『走る』は『ＲＵＮ』というらしく、読み方は――

「『ルン』……って読むのかな？」

　アルファベットは習っているので、それと同じように読んでみたけど、『２５番』は得意顔で、首を横にふる。

「これ、『ラン』って読むんだぜ」

　どうして『ラ』と読むことができるのか分からないけど、『２５番』が調べたんだから、まちがってはいないのだろう。『２５番』がどんな名前をぼくにつけようとしているのか、何となく分かる。

「『６８番』の名前、『６』と『ラン』で『ロラン』なんてどうよ？」

「『ロラン』……『ロラン』かぁ……」

　アクセントの位置は『ラン』でまちがっていないようで、ぼくの発音に『２５番』は何度もうなずく。

　変だとも思ったが、何度もとなえている内に、だんだんこの名前も良く思えてきた。ぼくはうなずく。

「うん。いいね、これ」

「だろ？」

　こうして、ぼく、『６８番』と『２５番』の名前は、『ロラン』と『闘悟』に決まった。あとは、先生のチェックさえ通れば、ぼくたちはようやく、六年間ずっとほしかった名前が手に入る。

　でも、その前にテストにごうかくしなければならない。

　時計を見れば、まだ夜の八時。後一時間は、ぼくも『２５番』も起きていられる。それだけあれば、勉強するにはじゅうぶんだ。

「『ロラン』、ほかにいい名前が思いついたからって、変えんなよ？」

「ふふっ、『闘悟』こそ」

　ぼくたちは、おたがいにわらいあう。これは、友情のあかしだ。一番大切な友だちからもらって、一番大切な友だちにあげた名前。

　その二つの名前を何度も何度も心の中でくりかえしながら、ぼくたちはつくえに向かった。